２．基調講演：嘉田 由紀子氏

「命と環境、未来を守る流域治水政策の挑戦 －滋賀県知事としての経験から－」

【日本の環境の未来を憂いて 2006 年、知事に挑戦】

あらためまして、皆さん、こんにちは。前滋賀県知事の嘉田由紀子です。

大村知事とは、三河湾保全のことで協力させていただきました。「三河湾と琵琶湖がほぼ同じ面積だ、ぜひ琵琶湖の環境保全の事例を教えてほしい」と、２年前だったでしょうか、大村知事が滋賀県にお越しいただきました。それから私も三河湾に訪問をし、今、実は子供たちの交流も始まっております。今年も滋賀県で川のシンポジウムをやるときに、三河湾の子供たちが来て、元気な発表をしてくれました。滋賀県の子供たちが圧倒されているというようなところもありました。自治体の中というのはどうしても自分たち特有の行政文化なり考え方がありますから、こうしてお互いに交流させていただくことで学ぶことが多いです。大変嬉しく思っております。

今ほどの知事のお話、かなり決意をなさっておられます。ぜひ皆さん、サポートしていただきたいです。今日も途中でもう退出されるということですが、知事というのは大変忙しい。今日、ここまで聴いていただいただけで、本当にありがたいと思います。

また保屋野さんの今のお話をお伺いしていて、実は私が知事をやらなければと切羽詰った思いは、まさに川をとりまく、物理構造、生き物、生態プラス人の関わり、この全体を、バランスを持って付き合う仕組みを作らないといけないと決意しました。日本の環境はコンクリートで固められ、ズタズタにひきさかれてしまう。そこに必要以上の過剰なお金を入れる。一方、教育や文化、人びとの福祉の向上にはなかなかお金が回らないというようなことになってしまうんじゃないか。そこは大変心配で、やむにやまれず８年前に知事として手を挙げさせていただきました。

【今日のハイライトは「流域治水」】

今日は皆さんのところに９０枚のパワーポイントをお渡ししておりますけれども、これを３０分でということですので、エッセンスだけお話をさせていただきます。そしてできるならばそれぞれ興味をお持ちの方、部分的にはそれぞれお読み込みいただけたらと思っております。よろしくお願いいたします。

まず今日のお話、なぜ滋賀県知事引退したのか。多くの方が「もっとやってほしかったのに」と言ってくださいました。実はやってほしくない人はそういうふうに言いませんから、私のところにはやってほしかったのにという声しか届かないのですが・・・。そこで引退の理由をあちこちで説明させていただいております。

それから、なぜ学者研究者が知事に、ということもよく尋ねられます。そして８年間何をやってきたのか。その中で特に環境に関わるところを今日は二つ、環境と水害対策、河

川ですね、特に説明させていただきます。

話題の中心は、琵琶湖の再生と人びととの関わりの再生です。今の保屋野さんのお話しの中にもありました、生態系の再生プラス、レクリエーションであるとか、人びとは環境に関わりたいと願っている、この関わりの再生ということに力をいれました。私自身もヨーロッパやアメリカ、そしてその前にはアフリカ研究をしておりました。そこで学んだのは、人類の要望は自然と近くにいたい、でもやっぱり制御もしたい、安全に住みたいというこの両義的なというのでしょうか、欲張りな人類の要望があり、そのバランスをとった政策を滋賀県として実現したいと思いました。

そして今日の１番のハイライトは、皆で命と暮らしを守る安全・安心、「流域治水」という政策です。少し言葉が硬いのですが、川の中で水量計算をして、ダムを造り、堤防を高くして水を河川に閉じ込めるという治水、これはこれで一定の効果はあるんですけれども、ただこういうハードの整備には限界があります。いくら「100 年計画の治水」と言っても、それよりも大きい規模の災害が来たらひとたまりもありません。

特に最近、日本の場合も温暖化の影響でしょうか、「想定外」とか「今までにないほどの大雨」とか、気象庁もいよいよそういうことを言わざるを得ない状態になっております。そういうときに、ハードは大事ですけれどハードだけに頼らない、ソフトといわれる避難体制、そして最終的には危ない所には人が住まないという土地利用規制、住むならば建物を高くして建物規制をするとか、ソフトの工夫ができないか、と。この辺りでしたら長良川の河口地域など、海津町などでは昔から水害を避ける安全な住まい方をしてきた。たとえば「水屋」という家の一部を高くし避難空間にするという、先人の命を守る工夫があるわけです。そういうことを今の行政の仕組みにも埋め込んでいこうというのが、テーマ８でございます。そして滋賀県の流域治水、この辺りはかなり技術的なことになりますので、ざっと走らせていただきます。

【なぜ知事を引退したのか？県民との約束を実現できたから】

まずなぜ知事を引退したのか。わかりやすく言えば 2006 年、2010 年、２回の選挙で県民の皆さんと約束した政策、マニフェスト政策をほぼやり上げたというか、実現をしたということでございます。

一つには、「税金のムダ使いもったいない」。公共事業の見直し、財政リスクの対応でもございますけれども、新幹線の新駅は完全に中止いたしまして、その跡にリチウムエナジージャパンという電気自動車の電池を作る工場を誘致いたしました。

六つのダムは中止・凍結、基本的にはまた後でお話ししますけれども、国のダムを三つ、それから県営のダムを三つ、中止・凍結をいたしました。

それから廃棄物処分場も、これ元々廃棄物処分場の必要性が低かったのに、県が、ゴミがいかにも増えるように情報操作をしておりました。やってはいけないことをやっていたんですね。それで結果的には処分場を中止したけれど、あまり大きな悪影響はないという

ことで、見直しをかけさせていただきました。

全体としては 3,000 億円ほどの事業ですけれども、具体的には借金 900 億円減らして、貯金は 300 億円増やすということで、この「税金のムダ使いもったいない」政策に道筋をつけました。

二つ目は人口リスク問題です。私は 1973 年に結婚し、75 年に第一子、79 年に第二子を産みましたけれども、その間、いかに女性が仕事と子育て、両立するのが難しいか、実感しました。このまま女性が仕事と子生み・子育てを両立できずに政府が無策でいたら、日本はいずれ女たちが反乱して子供を産んでくれなくなると、1970 年当時予言をしました。残念ながら、そのとおりになってしまいました。ということで、これは人口減少リスクとして、子育てしやすい社会、そのためには若い人が安定的な雇用、女性は仕事か家庭か二者択一を迫られるのではなく、両方希望したら叶えられる、そういう子供を育てやすい社会を作らなければという問題提起をしました。ここも８年間対応してまいりまして、ありがたいことに滋賀県は今全国２位の人口増加率になっております。やればできるということの成果だと思っております。

それから三つ目が、「琵琶湖の自然、壊したらもったいない」。これが環境リスク対応です。今日のポイントでもありますけれども、かつて実は環境政策は水質を基準にしていたんです。もちろん飲み水を確保するという意味では、水質目標が大事なのですが、琵琶湖のような、あるいは三河湾もそうですけれども、複雑な生態系をかかえている水域を考えるときには、目標値を漁獲高であるとか、あるいは固有種の維持であるとか、あるいは私は食いしん坊ですので、その固有種から作られた料理、たとえばフナズシを昔のように安く食べたいというような、そういう人の側、人間の文化の側から、需要側から目標を定めるということで進めてまいりました。

大村知事もきっとアサリをちゃんと昔のように安く食べられて、そして子供たちが自由にアサリを採れる、そういう、いわば人と近い環境を取り戻したいと思っておられるはずです。それが県民の皆さんの願いでもあると。実は政策というのは、需要側から、県民の皆さんの願いや思いから引きだしてくるときに、その意味や成果が見えやすくなってくるわけです。（これまでの政策は供給側の発想が多かったわけです）。

ということで、治水の問題も、ダムは手段です。命を守る、財産を守ることが目的です。ところが残念ながら、ここのところ、ダムを造ることが目的になってしまっているようなフシがあります。それはなぜかというと、国の方が、霞が関が、縦割り組織の不自由な中で、目的と手段をある意味取り違えているからです。

私たち自治体というのは、住民に近い立場から、命を守るにはどうしたらいいのか、多様な選択肢がある、その中でダムは一つの手段でしかない、ということを現場から考えてきました。このことは今、ヨーロッパでは明らかに、保屋野さんのお話の中でハードに頼るグレイ・インフラストラクチャーに対して、グリーン・インフラストラクチャーがあると言っていました。これを滋賀県は流域治水条例をつくるというところで実現をさせてい

ただきましたので、そのことをお話させていただきたいと思います。

大村知事、お時間のようですから、どうぞ皆さん、大村さんを拍手で送り出してください。これから頑張ってください。高い所から失礼します。ありがとうございます。続き、いかせていただきます。

【知事引退、後継者がみつかったことも理由のひとつ】

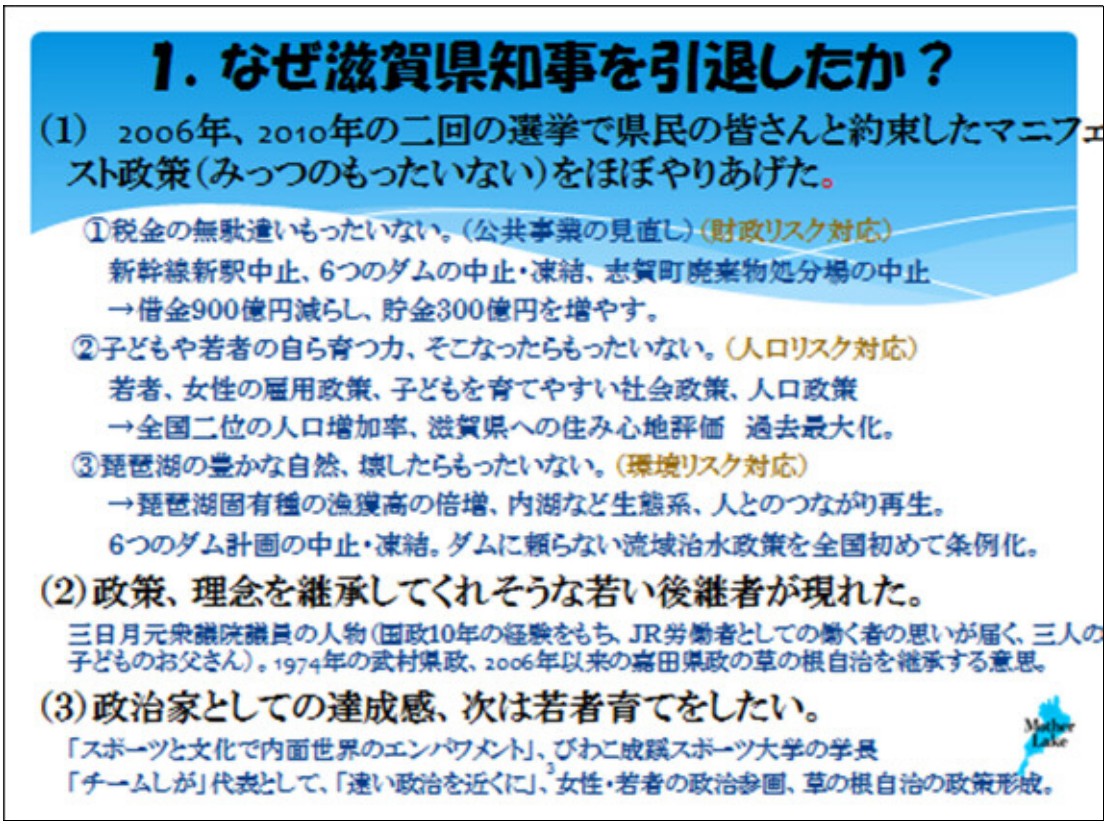
大きな二つ目の、知事を引退した理由ですね。後継者がみつかったということです。私は、「よそ者・女・学者に何ができるか」批判されてきました。できることをやらせていただきました。若い人にバトンタッチするならば、「地者・男・政治家」だったらどう？という反論でもあります。元気な人がいないかなと思っていましたら、１０年間衆議院議員をなさった三日月大造さんが、「嘉田さん是非知事のバトンを渡してください」と言われたので、その決意をいたしました。三日月さんは４３歳、１０年の国会議員の経験がありますから、国の法律を自治体でどう実現するかということで、大変政策通でもあります。

それから三つ目は、政治家としての達成感と言うんでしょうか、やるべきことをやった、２４時間 365 日、正直もうあと４年もたないなという感覚もございました。６４歳になりました。

【内面世界のエンパワメントをスポーツと文化から】

若い人を育てたい、琵琶湖畔に住んで、そして私は実は元々スポーツウーマンなんですけれども、スポーツと文化いうのは人間の内面を元気にする創造的な活動です。

ですから、そういう内面世界のエンパワーメントをやりたいなと思っていたところに、びわこ成蹊スポーツ大学の学長というお誘いがあったので、受けさせてもらいました。そちらで今やらせていただいていると同時に、「遠い政治を近くに」という地域活動を「チームしが」としてすすめております。政治の世界、女性差別の問題、いろいろありますけれども、みんな生活に政治は関係ないと思っているけれども、実は、子産み、子育てから経済から雇用から、みんな政治が決めるんです。そこに、若い人、女性にもっと入っていただきたいというところで、若者、女性の政治参画、未来政治塾というところも続けております。



【琵琶湖環境保全の草の根県政、４０年の自治を活かした知事選挙】

今回の知事選挙ですけれど、国が、安倍政権が、原子力発電所に反対する嘉田はけしからんと言って、２月の時点で、嘉田つぶしの刺客の候補者を送り込んできました。それに対して、どう対抗するかというので考えたのが、滋賀県の草の根自治だと気づきました。滋賀県は琵琶湖中心に草の根自治を４０年やってきたんです。1974 年、昭和 49 年に武村正義さんが当時の現職野崎知事をやぶったところから琵琶湖環境政策は始まっています。

特に富栄養化防止条例、せっけん条例をつくられた武村さん、武村さんはすでに今８０歳です。「わしは選挙には関わらん」と言うのを「武村さん、出てくれなかったら国に負けてしまうんですよ」と言って、そして武村さんと一緒に、三日月応援団をつくりました。街頭演説でも、「こちら武村さんです、私と三日月さん、８０歳と６０歳と４０歳ですから、おじいちゃんとお母さんとが息子を出した」という感じの選挙でしたけれども、結果的には県民の皆さんからのご支持をいただきました。ただギリギリだったので、やはりダム推進、あるいは原発の再稼働推進という勢力も一定程度あるということも認めなければいけないと思っております。

【「よそ者・女・学者」だからできた政策】

「よそ者・女・学者に何ができるのか」これ現職の時にはあまり言いませんでした。でも今、終わった以上言おうと思っています。よそ者だから、滋賀県の強みがわかる、あれ

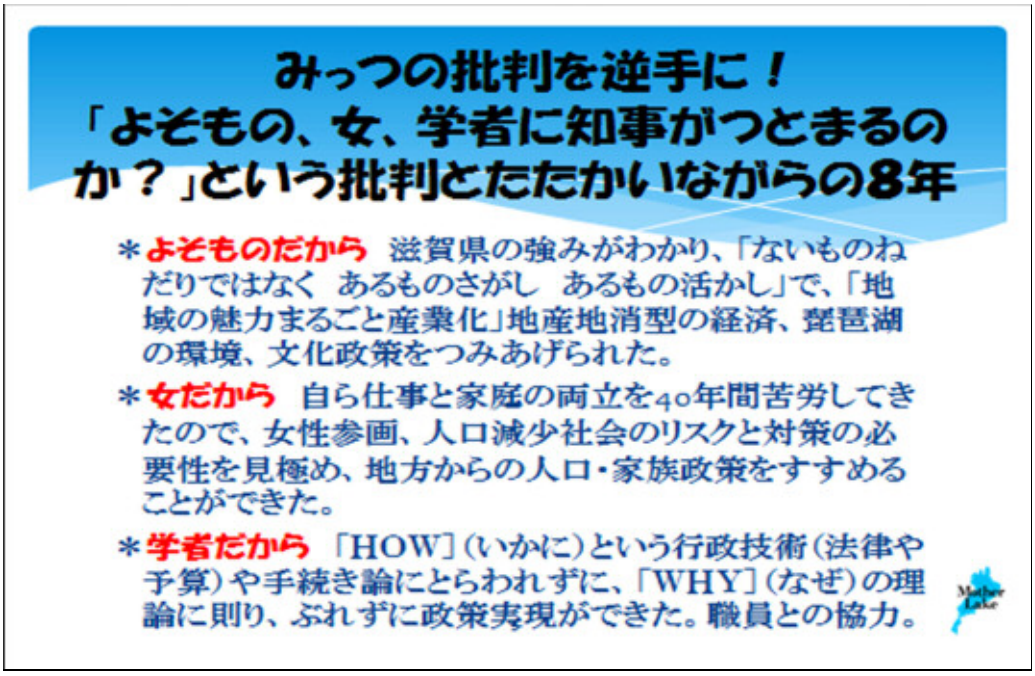
が無い、これが無いではない、無いものねだりではなくてあるもの探して、あるものを活かそう。ということで、琵琶湖があり、大変な文化財のある滋賀で誇りを持とう。

女だから、自ら仕事と家庭の両立４０年間、大変苦労してきました。今２人の息子が結婚して、お嫁さんもそれぞれに子育てと仕事を両立させております。５人孫が産まれ、あと一人産まれそうです。ありがたいです。人口減少といいますが、嘉田家では少なくとも、「ダブルインカム・スリーキッズ」を実現しております。別に個人的に自慢しようということではなく、方法をきちんと考えて社会政策にしようということです。

学者だから強みもある。実は行政手続きというのは HOW、大変細かい手続きがいっぱいあるんです。予算、法令、そして例えば法令のなかに、「等」の一文字があるかないかで全然意味が変わってしまうとか、その HOW のところにたけているのが、テクノクラート、官僚です。しかし残念ながら、なぜその HOW を実現したいのか、税金入れたのか、WHY のところは、あんまり官僚は関わってくださらない。

ダムの話が典型です。ダムを造ることが目的になってしまって、命を守るという本来国民が願っていることが、なかなか官僚組織の中に入ってこない。

私は学者ですからいつも HOW とともに WHY、なんでその政策必要なのか、それだけのお金、この法令つくって、誰がどういうふうに喜ぶのか、満足度が高まるのか自問自答しながら政策をすすめてきました。徹底できたのは、自分が揺るぎない、理論、つまり WHY を知る学者だったからかなと、今自画自賛をしております。これはみなさんからの評価を外からいただかなければならないと思っております。



【わが人生をふりかえってみると、アフリカ、アメリカ、そして日本へ】

そしてこのように思うようになった自分の背景を少し紹介させてください。私は滋賀県生まれではありません。埼玉県生まれで１５歳のとき修学旅行で比叡山延暦寺、琵琶湖に出会い、こういう所に住んでみたいと、琵琶湖に惚れました。

併せて７０年代、アフリカに一人で行って、電気もガスも、水道も無い所に行って、水１杯、食べもの１皿の貴重さを実感をして、そして、自然環境を壊したら人間生きていけない。環境との共生の仕組みについて勉強しようと思った時に、アメリカのウイスコンシン大学に、「エコシステムアプローチ　ツー　ソーシャルチェンジ」(Ecosystem Approach to Social Change) というちょうど生態系から見る社会変化論を学ぶコースがあったので、そこに留学をしました。

しかし結果的には、その留学したところの指導教員が、環境共生で、一番うまくやっているのは日本だと。アメリカはたった 200 年で、インディアンの自然共生を破壊し尽した。ヨーロッパでも今の環境は 800 年、1000 年です。日本は 2000 年 3000 年、水田を作り続けて、こんなにサステナブルな社会はないから、あなたは日本に帰って研究なさい、と言われました。1975 年です。それで日本に帰ってきて滋賀県琵琶湖周辺の農村地域の環境再生、あるいは環境との共生という研究をさせていただきました。

ですから８０年代は、琵琶湖と人の関わりの研究を、徹底的に集落を回りながら、水と人の環境史という分野を研究してきました。これはさきほど保屋野さんが言っておられた

ように、物理系、生態系、そして文化系、それをセットで保全したいという思想に根差しています。

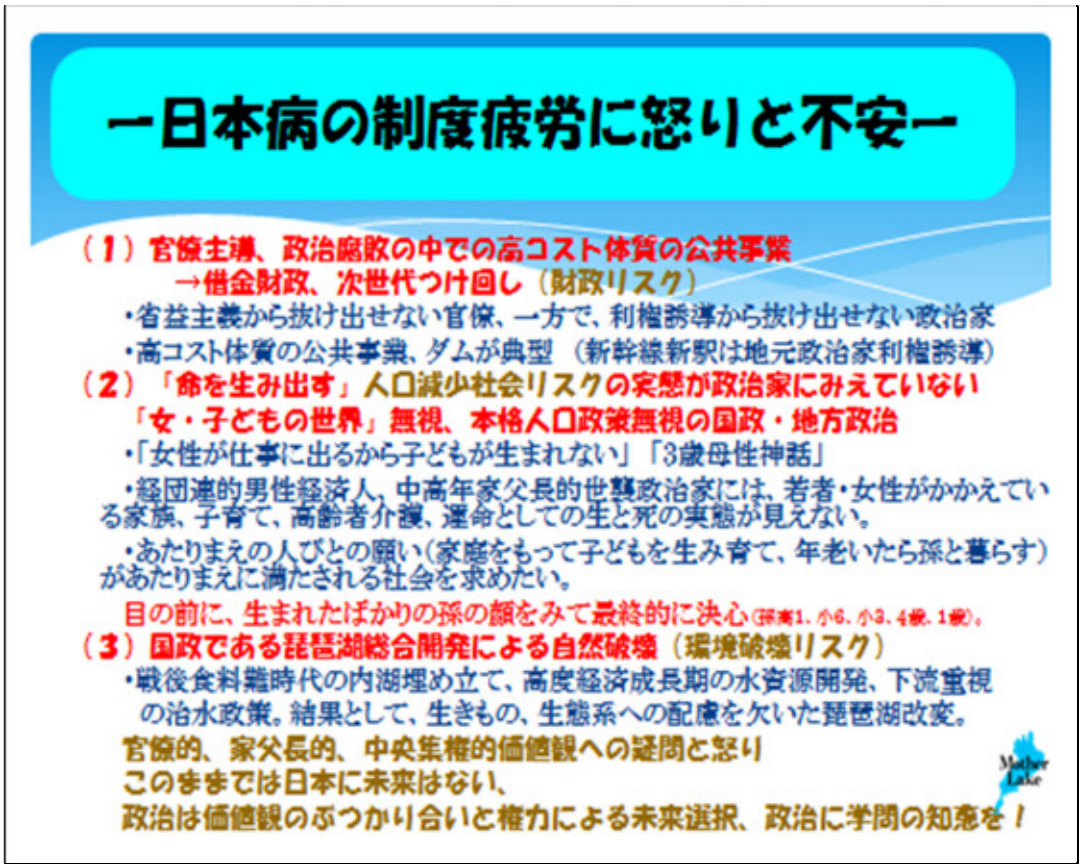
そこのところを学ばせていただいて、琵琶湖博物館を提案し、作り、そして 2000 年代、今日、後からパネリストに出られます今本さんとお会いしたのは、2000 年代の淀川水系の流域委員会でした。

この委員会で私自身がアフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、いろんな所で、出会ってきた川や湖の現象の背景となる構造的理屈を学ばせてもらいました。淀川水系流域委員会。ですから流域委員会で、やりたいと思っていたことを知事としてやらせてもらったというのが正直なところでございます。

アメリカ留学していたところがちょうど、マジソンという、４つの湖が有るところで、陸水学の拠点でもありました。ここで、キングさんという指導教員が、「由紀子、環境共生やりたいんだったら日本に帰りなさい」と言ってくださった方でもあります。

【2006 年、知事選挙では、「みっつのもったいない」を訴える】

ということで、もうすでに、知事としてやりたかった事は三つです。借金づけの「財政リスク」にどう対応するか、それから「人口減少リスク」にどう対応するか、そして「環境破壊リスク」です。



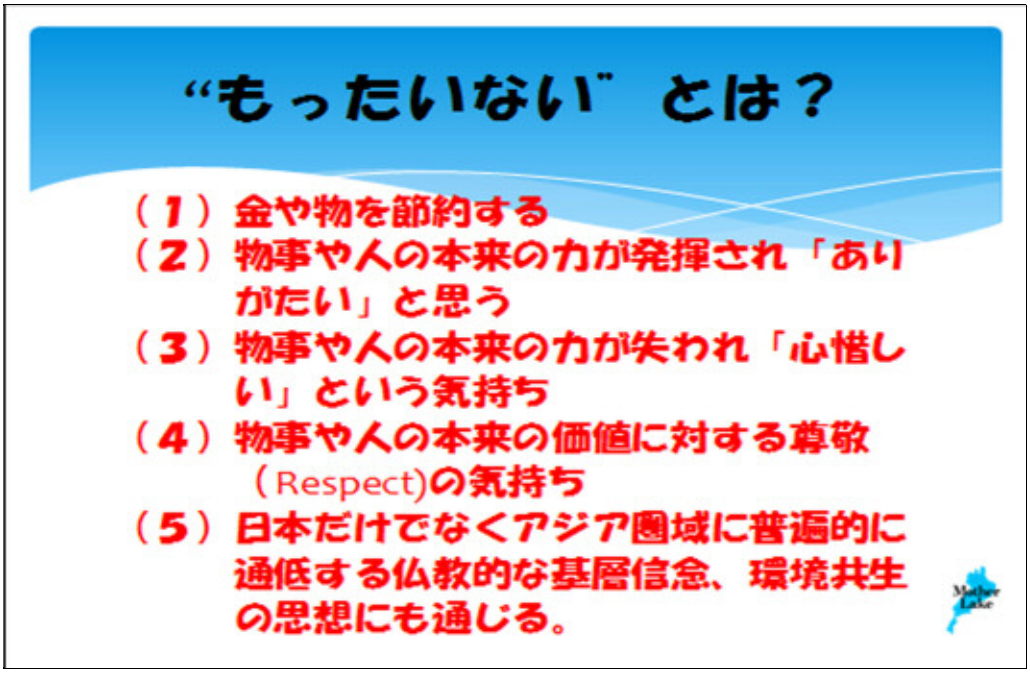
残念ながら、人口減少が一番結果的には財政リスクと含めて難しい問題だと思っております。

環境の方は、今、社会的に関心を持ち始められているので、どうにか、かなりの歯止めはかけられると思いますけれども、財政リスクと人口減少リスクというのは大変難しい、しかし両方が日本の場合、ひとつコインの裏表です。

つまり、教育を付けて資格を付けて、女性をせっかく育てているのに納税者にできない、あるいは社会保険を払う主体にできないということは国家の損失なんです。ですから、女性が社会参画できないという国家は、財政リスクも高い、ということこれ国際的にも証明されております。

たとえば、ヨーロッパで財政難の国、ギリシャ・イタリア・スペイン、アジアでは日本・韓国、この５か国は女性を家庭に閉じ込める、男性中心社会です。それに対して、女性の労働参加率が高くて、人口がきちんと維持できているのは、北欧、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、フランス、オランダですね。明らかに、結論は見えておりますが、どう実現するかというのは、安倍さんがどこまでやってくれるか、期待をしたいところではあります。

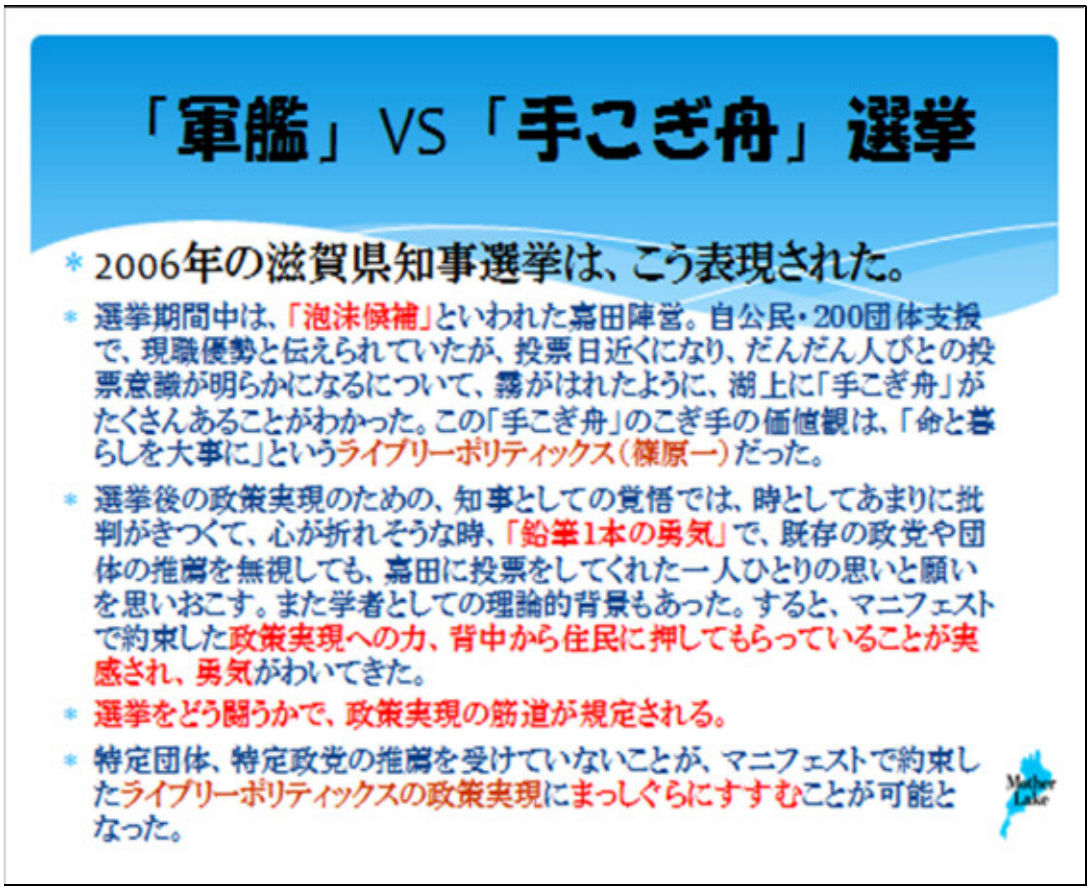
そんなところで、ここ、走りますけれども、どういう選挙をしたかということですが、「もったいない」というのは実は、金やものを節約するだけではなくて、物事や本来の価値に対するリスペクト、尊敬の念です。これはアジア圏域に普遍的に通底する仏教的な基層の信念であり環境共生の哲学でもあろうと思っております。



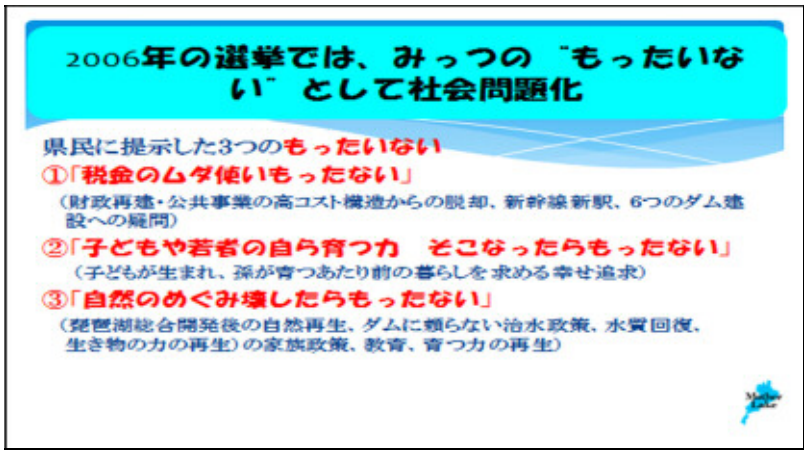
2006 年選挙は、相手さんは自公民現職、200 団体推薦、そこに対して完全に、「地盤ない、鞄ない、看板ない」３バンなしということで、挑戦させていただきましたけれども、結果的には、県民のみなさんが、嘉田に託そうと思っていただいた、大変ありがたいことです。

軍艦対手漕ぎ舟選挙と言われました。軍艦は石油が無いと、エネルギーが無いと動きません。手漕ぎ舟は１人ずつの思いがあったら動くんです。それで私は選挙態勢のみんなに、みんな結構、軍艦対手漕ぎ船とマスコミさんに揶揄されてるんでそこに対して、「いいじゃない、手漕ぎ舟こそ１人ずつでみんながその気になったらできるんだ」と元気づけました。１７日間の知事選挙のなかで挽回したのは最後の３日です。それくらい、なんていうんでしょうか、わくわくするような選挙でしたね。

私は最初から勝つと思っていたんですけど、勝つと思っていたのは私と私の後援会の会長の小坂育子さんという２人の女性だけでした。あとはみんな、今本さんも含めて、勝てるはずないよなと思っておられたんですけれども、つまり、時代が求めていたということだろうと思います。

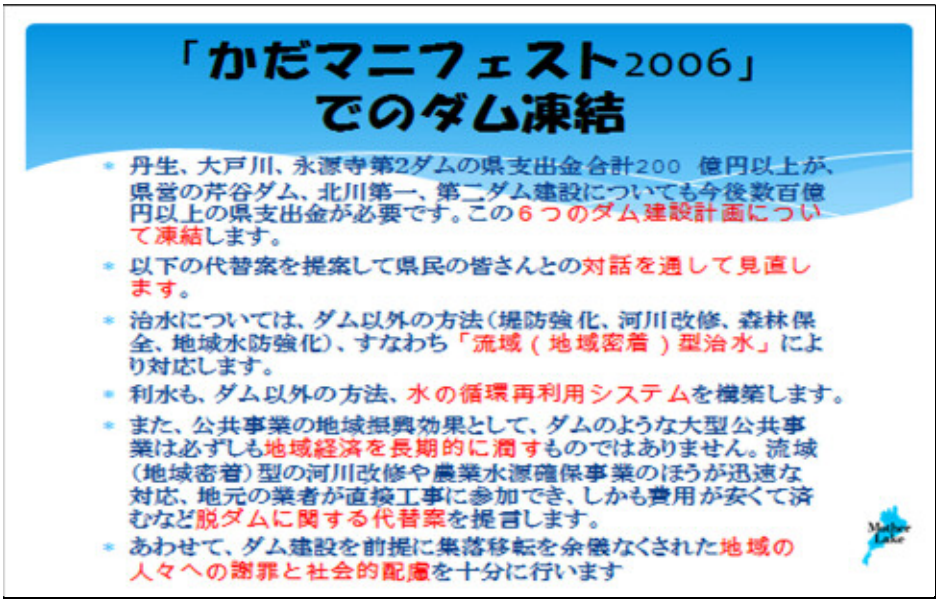


時代がすでに公共事業よりも子育てや、環境、そしてなによりも琵琶湖を大事にしてくれる嘉田さんにと、滋賀県民、時代が求めていたのだろうと思います。



【ダム不要は時代の精神の反映ではないか？】

その時代の求めの中の一つがダムでございます。当時、滋賀県には六つのダムがありました。この六つのダム建設計画について凍結します、と 2006 年マニフェストに宣言させていただきました。



代替案を提案して、県民のみなさんとの対話を通して見直します。治水についてはダム以外の方法、堤防強化、河川改修、森林保全、地域水防強化、すなわち流域、地域密着型治水により、対応します。利水もダム以外の方法、水の循環再利用システムを提案します。

また、ダムをやったら公共事業で地域にお金が落ちるじゃないか、という意見あります。確かに地域経済の維持は大切です。それに対しては、公共事業の地域振興効果としてダムのような大型公共事業は、必ずしも地域経済を長期的に潤すものではありません。流域型

の河川改修や農業水源確保事業のほうが、迅速な対応、地元の業者が直接工事に参加でき、しかも費用が安くて済むなど、脱ダムに関する代替案を提言しますと表明しました。

愛知県の設楽ダム、2,000 億円か 3,000 億円入れる、そのうちどれだけ地元の小さな土木業者の方にお金が落ちるか、きちんと見続けてください。

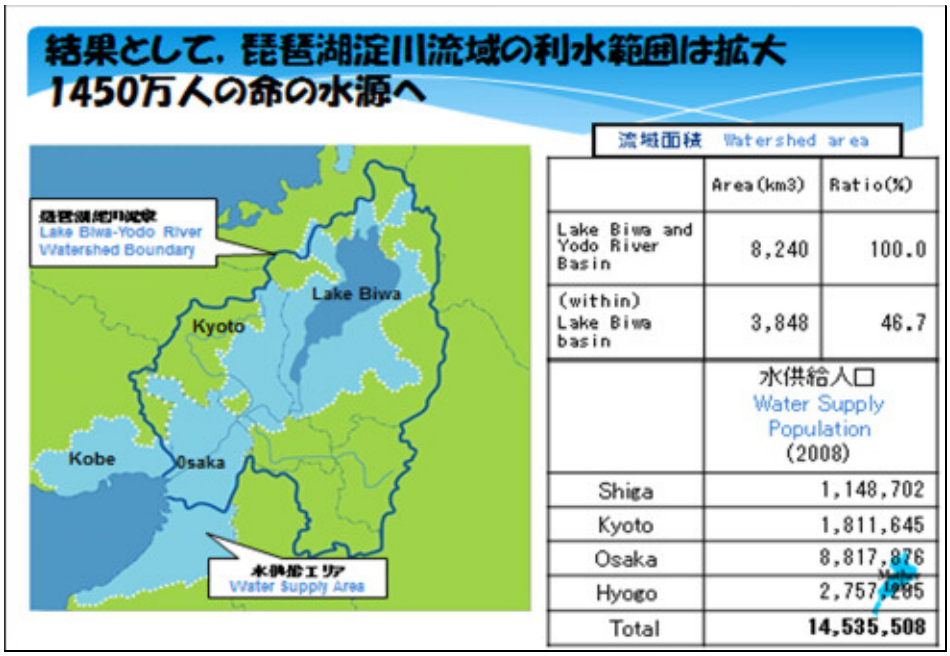
私は滋賀県内のダムでやりましたけれども、実はですね、子請け孫請けで、はっきり分からないんです。けれども地元の業者さんは、「大型事業になればなるほどダムはワシらはできへん。構造計算なんかゼネコンしか対応できない」というようなことなので、河川改修や堤防強化というのは地元の土木業者が対応できると言います。

併せてダム建設を前提に集落移転を余儀なくされた地域の人々への謝罪と社会的配慮を十分に行います。８年間でこれ基本的にはほぼ全て実現をしてまいりました。今日は時間が無いので詳しく申し上げませんけれども、特に地域で４０年、５０年ダム建設に翻弄されてきた方達には、地域に住み続けるための家を直す、そして高齢者への福祉、また若い人に入ってもらって「未来つくり隊」というようなところで若者が定着するそんな地域再生の仕組みもつくってまいりました。

【琵琶湖の再生は在来種の復活から】

そして、この後の８つの政策の中の「琵琶湖の再生」を少しご紹介したいと思います。これも先ほど保屋野さんがおっしゃっておられた水質プラス生態系の再生プラス人びととのかかわりの再生というところで、まさに統合的管理ということを進めさせていただきました。

琵琶湖の水は、京都、大阪、この図の青いところの 1,450 万人に供給されております。



流域面積 Watershed area

	Area(km3)	Ratio(%)
Lake Biwa and Yodo River Basin	8,240	100.0
(within) Lake Biwa basin	3,848	46.7

	水供給人口 Water Supply Population (2008)
Shiga	1,148,702
Kyoto	1,811,645
Osaka	8,817,876
Hyogo	2,757,285
Total	**14,535,508**